

第1章 転移してきた女勇者の末路

プシュッ。

缶を開ける音が、一人暮らしの二DKアパートに響いた。仕事から自宅に帰ってきて疲れ切ったOLが手に持つのは、ストロングゼロ・レモンサワー五〇〇ミリリットル缶である。これが彼女の1日の疲れを癒すための唯一の楽しみだった。

「あー、今日も一日クソだった」

リヴィアは大きなため息をつきながら、スーツのジャケットをソファに投げ捨てた。金髪のポニーテールもすでに崩れかけ、ストッキングを脱いだが片方は伝線していた。顔には仕事への倦怠感がベッタリと張り付いている。それでも右手に握りしめるストゼロだけはしっかりと離さない。

二十九歳。独身。一般企業の事務職員。年収300万円。最近始めたマッチングアプリの「いいね」は月に2件。

どこにでもいる、ごく普通の――いや、むしろ絶望的に冴えない部類のOLである。しかし彼女はかつて異世界を支配した魔王から世界を救った女勇者「リヴィア・クロスフィールド」その人である。

「カエザル、ただいま」

リヴィアはリビングから居間の奥に声をかけた。そこにはテレビに向かって座っている小学生くらいの少年の後ろ姿がある。黒髪をわしゃわしゃとした、どこか憂いを帯びた表情の美少年だった。

「おかえり、リヴィア。今日も遅かったではないか」

振り返ったカエザルは、手にニンテンドースイッチのコントローラーを握りしめている。テレビ画面には大乱闘スマッシュブラザーズのタイトル画面が映し出されていた。

「残業よ、残業。全く三六協定はどうなってんのよ！ 部長のやつ、プレゼンの資料全部私に丸投げして来やがって、それを片付けるために今日もこんな時間よ！ それより、カエザルあんた、ゲームやる前に宿題は終わらせてんでしょうね？」

「お主と一緒にするな。宿題ぐらいとうに終わらせておるわ。それよりもリヴィア、お主、飲み過ぎではないか？」

小学生とは思えない落ち着いた口調——というより完全に上から目線で、カエザルはリヴィアの飲み過ぎを指摘する。リヴィアはストゼロをぐいっと一口飲んでから、ソファにドスンと座り込む。スカートが少しめくれて素肌の太ももが見えるが、気にする様子もない。

「うっさいわね！ 社会人のストレスってのはね！ 小学生のガキにわかるようなもんじゃないのよ！」

リヴィアは手元のストゼロの空き缶を片手でぐしゃりと握りつぶすと、コンビニの袋から新しく今度はストゼログレープフルーツ味9%を取り出す。リヴィアは爪でプルトップを引き上げようとするが、引っかからずに開かない。

「チッ、どいつもこいつも……」

リヴィアはそういうと、向こうの部屋のテレビ台に歩いて行く。テレビ台の上には、美しく輝く長剣が横たえられていた。刀身は銀色に輝き、柄頭には神々しい宝石があしらわれている。見るからに神秘的で、高貴な雰囲気醸し出す逸品だ。

聖剣カリバーン。

かつて異世界で魔王を討ち取った、伝説の聖剣。神々の祝福を受け、一振りで山を割り、闇を払う究極の聖剣である。

リヴィアはその聖剣カリバーンを掴むと、慣れた手つきで柄の部分の飾りにストゼロのプルトップを引っ掛けて引き開けた。

プシュッ。

中身が聖剣に掛かるが、リヴィアは気にする様子もない。そのまま聖剣を戻すと、リヴィアはソファに戻ってきてドスンと座り込み、くいぐいとストゼロを飲み始めた。

カエザルは呆れた様子でリヴィアのそんな様子を見つめてる。

「……まったく、聖剣をストゼロの栓抜きに使う勇者があるか」

カエザルは顰めっ面をしながら、コンビニの袋の中からファンタオレンジのペットボトルを取り出す。

「何よ！？ 私がもらった聖剣よ！？ 何に使おうが私の勝手よ！」

「そんなことだから女神も拗ねると思うのだが……まあ、君がそう申すのであれば、構わぬ」

カエザルも元勇者の墮落ぶりには慣れっこである。この元勇者リヴィア。異世界の戦乱を収めて、現世日本に転移してきたのだが、最初こそ現代日本で成功してみせると意気込んでいたが、焦ってブラック企業に就職してしまい、ストゼロ中毒に陥り、今では純然たる立派なダメ人間である。

ドロンとした目でリヴィアはカエザルの元にやってくる。リビングの脇にあったヨギボーを持ってくると、ドスンと腰を下ろした。

「何ぬるいプレイしてんの。どれ、お姉さんがいっちゃ揉んでやるわよ」

そういうとリヴィアはSwitchのもう一つのコントローラーを手にして、慣れた手つきでゼルダを選択した。カエザルは少し顎を上げると、プレイヤー選択でカービィを選択する。

数分後。

「あー、やられたわ！ カエザル、あんたちょっとは手加減しなさいよ！ 魔王だからってゲームで強すぎるのは反則よ！」

「戦いに手加減は無用であろう？ それにお主も、昔はもっと強かったではないか。今のお主を見ておると、本当にあの時の勇者かと疑いたくなるわ」

リヴィアはストゼロを再び一口飲んだ。アルコールが体に染み渡り、今日一日の嫌なことを忘れさせてくれる。そう、今日もまた職場で嫌なことがあった。リヴィアの脳裏には昼間の出来事が思い浮かぶ。

「それは別部署の管轄ですので、申し訳ございませんが……」

田中部長から言われたプレゼン作成を、いつもの言い訳で回避しようとしたことを思い出す。すでにこの言い訳は決まり文句である。なんで私がといつもいつも思うのだけど、田中部長には目の敵にされており、いつも面倒ごとを押し付けられる。

リヴィアは酒臭いため息をつく。

「もう、やる気なんて出るわけじゃない。毎日同じことの繰り返しで、何が楽しいのよ？ 昔は世界の平和を守ってたのに、今は売上管理のExcelよ？ 関数なんてわかんないのにマクロも勉強しろというのよ？」

カエザルはさも哀れな存在を見るような目つきでリヴィアを見る。なだめるような口ぶりでリヴィアに話しかけた。

「そうであったか……。だが、君は本来もっと輝いておったと思うのだがな。今の君を見ていると……何というか……その……」

カエザルの言葉に、リヴィアは複雑な表情を浮かべた。昔の自分を知っている人間——しかも宿命の相手だった魔王に言われると、なんとも言えない無様な気持ちになる。

そう、昔の自分は確かに輝いていた。



五年前——

「魔王カエザル！　今こそ貴様を討つ！」

金色に輝く甲冑を着込んだ女騎士は、魔王城の玉座に向かって聖剣カリバーンをかざす。勇者、リヴィア・クロスフィールド、この時、二十四歳。創造神エリュナの祝福を受けた、異世界エルデンシアが誇る最強の女騎士。その凛々しい眼差しは、射るように玉座の頂上に向けられていた。

魔王城の最深部、玉座の間。玉座に腰掛けるのは、漆黒の黒衣を纏う、魔王カエザル。長身で濡れたような黒髪を掻き上げ、低いバリトンの声でリヴィアに答える。

「我が配下達はどうした？　あれだけのモンスターを倒し、よくぞ玉座の間まで辿り着いたものだ勇者リヴィア。その悪運は認めるしかないな」

魔王カエザルは静かに玉座から立ち上がり、その腰に下げていた黒刀をリヴィアに向けた。

「貴方とも長い付き合いね。しかし、今度こそ決着をつける！」

カエザルは冷たい眼差しを落とし、そして地の底から這い上がってくるような声で答えた。

「散々、我が覇業を邪魔してくれたな勇者よ。今日こそお前に俺直々、引導を渡してやろう」

勇者は玉座の魔王の元へ飛び上がる。魔王は黒刀を構え、二つの剣が衝突して激しく火花が散った。

何度となく2つの剣が交錯する。光と闇の力がぶつかり合い、そのエネルギーの余波で城の外にはオーロラが発生した。これが、後に「最果ての白夜」と呼ばれた、二人の最終決戦だった。

そして――

肩で息をしているリヴィアは、呼吸を整えて聖剣を持ち直した。その前には刀が折れた魔王カエザルが膝をついている。

「私の勝ちよ、魔王カエザル！」

「.....クッ」

聖剣の切っ先が、魔王の喉元に突きつけられていた。

この戦いの勝利で、エルデンシアは光の祝福で満たされた。人々の喜びの声の中で、いつの間にか勇者リヴィア・クロスフィールドは、かき消されるように歴史の表舞台から姿を消したのである。創造神エリユナは、勇者を祝福して、彼女の名を冠した新たな千年紀の始まりを人々に宣言した。

そして、現代日本に転移したばかりの頃

「ここが現代日本.....」

見慣れない風景に戸惑いながらも、リヴィアの目には希望の光があった。新しい世界での新しい人生。きっと何か素晴らしいことが待っているに違いない。

「よし、頑張りましょう！」

あの頃の彼女は、まだ前向きだった。

そんなある日、アパートの玄関に一通の手紙が届いた。

親愛なる元勇者様へ

魔王討伐お疲れ様でした♪

ささやかなプレゼントです。

大切に育ててくださいね❤️

女神の贈り物❤️

P.S. 取扱説明書は付いていません。頑張って❤️ 女神から愛を込めて❤️

「なによこれ？ エリユナ様は何をを考えているのかしら.....？」

手紙と一緒に置かれていたのは、すやすやと寝ているランドセルを背負った小学生くらいの黒髪の少年だった。眠っているその顔を見た瞬間、リヴィアは驚愕した。

「え……魔王カエザル？」

魔王が、なぜか小学生の姿で送りつけられてきたのである。

「どういうこと！？ 女神様は魔王を更生させろとおっしゃってる？」

「あの頃は良かったわよねえ……まさか5年後、聖剣で缶ビール開けてるとは思わなかったわ」

現在のリヴィアは、ストゼロを飲みながらぼんやりと過去を振り返っていた。転移してきたばかりの頃は確かに、新しい人生への希望があった。「現代日本で新しいスタート！」なんて張り切っていた時期もあった。正義のために戦った誇りも、まだ胸に残っていた。今は胸にあるのはブラの跡だけだが。

それが今では、ストロングゼロに依存する絶望的負け組OLである。元勇者の肩書きが泣いている。

「あの時はまだ、バカみたいにやる気があったのよね。『私が責任持って魔王を更生させる！』とか言ってたし」

魔王が送りつけられてきた時も、最初は責任感があった。「魔王を更生させて、この世界で立派に生きていけるようにしよう」なんてまじめに考えていた。更生プログラムまで作りかけた。

それが今では、一緒にスマブラをして、ファンタを飲ませて、完全に墮落した共同生活を送っている。更生どころか、一緒に墮落している。

「リヴィア」

カエザルが呼びかける声に、リヴィアは現実に戻された。

「何よ？」

「君は今でも、あの時の勇者だと思っておるか？」

「……わかんないわよ、そんなの」

リヴィアは正直に答えた。自分でもわからないのだ。あの頃の自分と今の自分が、果たして同じ人間なのかどうか。

「そうであるか。だが、少なくとも俺は、君がどのような姿になろうとも、あの時の勇者だと思っておるぞ」

「なんでよ。私なんて、もうただの酒に逃げてるダメ人間よ。今日だって、プリンターの紙詰まりに30分も格闘してたのよ？ 昔の私ならドラゴンと30分格闘してたのに」

「それでも、君は君であろう。.....ただし、プリンターとの戦闘力は確実に落ちておるな」

カエザルの言葉に、リヴィアは少し胸が熱くなった。こいつは昔から、こういう妙にかっこいいこと——からの毒舌コンボを決める奴だった。

「まあ、どうでもいいわ。今日はもう寝るわよ。明日もまた、コピー機と格闘する日々が待ってるし」

リヴィアは残ったストゼロを一気に飲み干し——少しむせながら立ち上がった。明日もまた、面白くもない会社に行かなければならない。電車は混むし、上司はうざいし、昼食はコンビニ弁当だし。

「おやすみ、リヴィア」

「おやすみ、カエザル」

部屋の電気を消して、リヴィアは寝室に向かった。聖剣カリバーンは、相変わらずテレビ台の上で静かに光を放っている。

かつて世界を救った伝説の剣が、今では酒の栓抜きと化している。しかも使用頻度が高すぎて、刃先に小さな欠けまでできている。

これ以上に皮肉な現実があるだろうか。元勇者の転落人生、ここに極まれり。

だが、それでも明日は来る。リヴィア・クロスフィールド、二十九歳の、新しい（でも多分昨日と同じような）一日が。

文字数: 約4,100文字 **次章への伏線:** 魔王軍の襲撃予告、日常への刺激 **キャラクター状況:** リヴィア（墮落した日常に慣れきっている）、カエザル（リヴィアの現状を受け入れつつ見守る）

第2章 魔王軍（自治体申請済み）襲来！

翌日の土曜日の朝、リヴィアは二日酔いでぐったりとしていた。昨夜のストゼロが効きすぎて、頭がガンガンと痛む。

「うう、クソ気持ち悪いわ.....」

「リヴィア、またであるぞ」

カエザルがポストから取ってきた郵便物を見せにきた。その中に、見慣れた奇妙なチラシが混じっている。

「またきやがったわ！」

リヴィアは頭痛も忘れてキレた。もう何度目かわからない、魔王軍からの律儀すぎる戦闘予告だった。

【第47回 勇者討伐作戦 実施のお知らせ】

日時: 本日午後2時より

場所: 三丁目公園

主催: 魔王軍一同（自治体申請済み）

見学: 可能（専用エリアをご用意しております）

お問い合わせ: 090-xxxx-xxxx（ヴァルグ）

近隣住民の皆様にはご迷惑をおかけしますが、何卒ご理解のほどよろしくお願いいたします。なお、戦闘終了後は清掃活動も実施予定です。

「第47回って何よ第47回って！ もうシリーズ化してんじゃないのよ！ 返し討ちにする側も飽きるわよ！」

リヴィアは完全にブチギレた。これまで散々襲撃を受けて、毎回聖剣で返し討ちにしてきた。もはやチャンバラではなく、日常。定期イベント。それなのにまだ懲りずにやってくる。

「しかもまた自治体申請済みって.....マジで面倅くさいわ」

「ヴァルグのことだ。今回もきちんと役所に行って手続きをしたのだろう。それどころか、先日市民税もきちんと納めていたぞ」

カエザルは呆れたというより、むしろ感心したような顔をしていた。魔王軍のナンバー2であるヴァルグは、異常なまでに生真面目な性格で、現代社会のルールをリヴィアよりも完璧に守っている。住民税、国民健康保険、年金もきちんと支払っている優良市民。

「あいつ、何度返り討ちにあっても懲りないのよね。学習能力ってもんがないの？」

リヴィアはため息をついた。これまで何度もヴァルグに泣きながら土下座されて、魔王の帰還を懇願されてきた。そのたびに殴って追い返していたのだが、全く諦める気配がない。

「お中元とお歳暮も毎回送ってくるし、ほんとウザいわよね」

「それは、俺への忠義の表れであろうからな……」

「あんたが止めさせなさいよ」

「俺が何を言っても聞かぬのだ。あいつは昔からああいう奴である」

リヴィアは渋々立ち上がった。また面倒な戦闘をしなければならない。

午後2時、三丁目公園。

リヴィアとカエザルが現場に到着すると、そこには信じられない光景が広がっていた。

「お疲れ様です！　こちらが見学エリアになります！」

公園の入り口では、角の生えたオーガが手作りの看板を持って案内をしている。見学エリアには既に数十人の近隣住民が集まり、まるで学園祭のような和やかな雰囲気だ。

「あ、ポップコーンいかがですか〜！」

小鬼族のゴブリンが、手押し車でポップコーンを売り歩いている。完全にお祭り状態である。

「なによこのカオス……」

リヴィアは呆然とした。魔王軍の襲撃というより、地域のイベントにしか見えない。

「勇者よ！　今回こそ必ず！　毎回毎回同じこと言っててすみませんが！」

公園の中央で大きな声が響いた。そこに立っていたのは、黒い鎧を身にまとった筋骨隆々の魔族、ヴァルグだった。頭にはスポーツタオルを巻いている。何故か、気合いが入っている。

「また来やがったわねヴァルグ！ いい加減にきなさいよ、もう！」

リヴィアは怒鳴った。もううんざりだった。5年前の最終決戦では確かにカエザルの右腕として強敵だったが、今ではただの迷惑な常連客でしかない。

「魔王様をお返しいただく！ それが叶わぬなら、力づくでも！」

ヴァルグは堂々と宣戦布告した。しかし、その周りでは他の魔族たちが交通整理用のコーンを設置したり、「危険ですので黄色いテープより内側にお入りください」という看板を掲げたりしている。

「あの、すいません」

見学エリアから一人の主婦が手を挙げた。

「戦闘はどのくらいの時間を予定されていますか？ 夕飯の支度があるので」

「申し訳ございません！ 予定では30分程度を考えておりますが、長引く場合は随時お知らせいたします！」

ヴァルグが丁寧に応答する。完全に地域住民への配慮が行き届いている。

「なんなのよこれ……」

リヴィアは頭を抱えた。これが魔王軍の襲撃だろうか。

「リヴィア、とりあえず聖剣を」

「あー、はいはい」

リヴィアは面倒くさそうに聖剣カリバーンを手に取った。昨夜栓抜きとして使ったばかりなので、まだビールの匂いが微かに付いている。

「では、始めさせていただきます！」

ヴァルグが号令をかけると、魔王軍のモンスターたちが一斉に攻撃を仕掛けてきた。

「うおおおお！」

スケルトンやゾンビ、オーガにゴブリンと、まさに魔王軍らしい面々である。しかし、なぜか全員が「すみません！」「危ないので下がってください！」など、やたらと礼儀正しい。

「ったく、めんどくさいわね」

リヴィアは聖剣を振るった。たとえビールの栓抜きに成り下がっていても、聖剣カリバーンは伝説の剣である。魔族たちは次々と光に包まれて消えていく。

「うわー、やられたー」

「すみませんでした〜」

倒れたモンスターたちは、なぜか観客席に向かって一礼してから消滅していく。完全にプロレス的なエンターテインメントだ。

「ぐああ！ さすがは勇者！ だが、これはどうだ！」

ヴァルグが最後の切り札として、巨大な魔法陣を展開した。そこから現れたのは.....

「あれ、また犬サイズのドラゴン？」

確かにドラゴンだった。しかし、いつものように中型犬くらいのサイズである。

「きゅるるー」

可愛らしい鳴き声を上げる小型ドラゴン。観客席からは相変わらず「可愛い！」「写真撮らせて！」という声上がる。

「あんた、毎回同じドラゴンじゃないの。金欠なら襲撃やめなさいよ」

「魔王軍にも活動資金の限りがある！ それでも魔王様のためなら！」

「知ったことかバカ！」

相変わらず現実的すぎる理由に、リヴィアの怒りは頂点に達した。

「ウッセーんだよ雑魚！」

リヴィアは完全にキレた。47回目の戦闘が、毎回こんな茶番劇だなんて我慢できない。

「本気でやりなさいよ本気で！ 私を誰だと思ってんのよ！ 47回も来て毎回この程度って、ナメてんじゃないわよ！」

聖剣カリバーンが輝きを増す。たとえビールの栓抜きとして愛用していても、中身は本物の聖剣だ。

「うおおお！ これぞ真の勇者！」

ヴァルグの目が輝いた。久々にリヴィアの本気を見ることができて、感激している。

「ストゼロ箱で献上しろ！」

「え？」

「私が欲しいのは戦いじゃないわよ！ ストゼロよ！ 1箱24缶入りのやつ！ それを毎月献上しなさいよ、そしたら魔王返してあげるから！ あ、できればプレミアム版で！」

完全に現代の酒飲みOLと化した要求だった。しかもグレードアップしている。

「そ、そんな要求が……」

「あ、あとファンタもよ。カエザルの分」

「承知いたしました！」

ヴァルグは即座に了承した。魔王の帰還に比べれば、ストゼロとファンタの定期配送など安いものである。

「では、これにて第47回勇者討伐作戦を終了いたします！ ご見学いただいた皆様、ありがとうございました！」

観客席から拍手が起こる。完全に地域のイベントとして成功していた。

同じ頃、天界では――

「ぎゃははははは！ 何それ、超ウケる！」

天界の玉座で、銀髪の美少女が水晶玉を見ながら大爆笑していた。創造神エリュナである。

「ストゼロ箱で献上って、あんたマジでどうしちゃったのよ」

エリュナは手元のポップコーンを口に放り込みながら、リヴィアの戦いぶりを観戦していた。

「でも、まあ面白いじゃない。魔王軍の方が社会に適応してるなんて、皮肉よね～」

創造神の采配で現代に転移させられた面々だが、適応力に関してはリヴィアが一番ダメだった。

「さて、次はどんな騒動を起こしてくれるかしら」

エリュナは楽しそうに呟いた。この世界の騒動は、全て彼女の掌の上で起きている出来事なのだ。

「でも、そろそろ本格的に動いてもらわないとねえ」

水晶玉の中では、リヴィアとカエザルが近所のコンビニでストゼロとファンタを買い込んでいる姿が映っていた。

まだまだ、物語は始まったばかりである。

第3章 妹と過去とグラタン

日曜日の朝、リヴィアは二日酔いと戦いながらカレンダーを眺めていた。そこには赤いマーカで大きく丸印が付けられている。

「今日はセリナが来る日だったわ.....クソ、忘れてた」

慌てて時計を見ると、もう午前10時を過ぎている。セリナは11時に来る予定だ。

「カエザル！ やばいわよ！ 妹が来ちゃうの！」

「ああ、そうであるか。それは大変であるな」

カエザルは相変わらずスマブラをしながら、のんびりと答えた。彼にとってはいつものことでも、リヴィアにとっては一大事である。

リヴィアは慌てて掃除を始めた。といっても、昨夜も夜通し掃除をしていたのだが、肝心なところで力尽きてしまったのだ。

「あー、クソヤバい、マジヤバい！完全にホラー映画の始まりじゃん！『部屋に住む謎の生物と墮落した姉』ってタイトルで映画化決定よ！」

部屋の片隅には、相変わらずストゼロの空き缶が小さなタワーを築いている。昨夜飲んだ分も含めて、すでに10缶近くが積み上がっていた。まるでアルコール依存症者の現代アートである。

「これ、マジでどうしよう.....インスタ映えする『ストゼロタワーチャレンジ』として売り出す？いや、それはヤバすぎるわね.....」

慌てて空き缶をゴミ袋に詰め込む。ガシャガシャと音を立てる空き缶の音が、まるで犯罪現場の証拠隠滅BGMみたいだ。冷蔵庫の中身も相変わらず、マヨネーズとストゼロと賞味期限切れの味噌チューブだけ。この3つで料理番組に出たら、確実に『極限料理人』としてバズれる自信がある。

「せめて野菜くらい買っておけばよかったわよ.....コンビニのサラダも野菜カウントしていいわよね？え、ダメ？マジで？」

そんな時、玄関のチャイムが鳴った。

「お疲れさまです、姉さん」

扉を開けると、そこには美しい女性が立っていた。セリナ・クロスフィールド、26歳。リヴィアの妹で、元聖女である。

長い栗色の髪を上品にまとめ、清楚なワンピースに身を包んだ彼女は、どこからどう見ても勝ち組の女性だった。手には掃除道具の入ったバッグと、手作りらしき料理の入った紙袋を持っている。

「あ、セリナ……」

「またストゼロの匂いがします」

セリナは部屋に入るなり、鋭く指摘した。さすが妹、容赦がない。

「そ、そんなことないわよね〜♪」

完全に棒読み。小学生の演技指導でももう少しマシである。

「嘘をつくのはやめてください。あと、なぜカエザル君は朝からゲームをしているのですか？日曜の朝といえば『サザエさん』か『仮面ライダー』でしょう？」

「おはようである、セリナ」

カエザルは振り返って挨拶したが、手はコントローラーから離さない。画面では『大乱闘スマッシュブラザーズ』のピカチュウが敵を電撃で吹っ飛ばしていた。彼にとってセリナは、リヴィアを叱ってくれる都合の良い『お小言役』でもあった。まるでRPGの便利なNPCである。

「まったく……」

セリナはため息をつきながら、持参した掃除道具を取り出した。

「姉さん、クローゼットを開けてみてください」

「え、なんでよ？」

「いいから開けなさいよ」

恐る恐るクローゼットを開けると、そこには使い込まれた下着類が無造作に詰め込まれていた。しかも上下がバラバラで、明らかにしまむらの激安品ばかり。『しまむら下着コ

レクシヨン2015～2020』とでもタイトルを付けられそうな、ある意味歴史的価値のあるラインナップである。

「これ……まだ同じものを着ているのですか？」

セリナの声が震えている。

「だって、まだ使えるじゃないのよ……」

「姉さん、これは5年前に異世界で買ったものですよ？」

「まあ、そうだけどさ……」

「そして、これは……」

セリナがベランダの方を見ると、洗濯物が干されていた。その中に、ゴムが完全に伸びきったラッコ柄の下着が風に揺れている。

「あああああああ！」

セリナが悲鳴を上げた。

「姉さん！ 下着を外に干すのはやめてください！ セめて柄物はやめてください！
というか、そのラッコ柄、10年ものじゃないですか！」

「これは戦場でも守ってくれた勝負パンツなのよ！10年間、私の貞操と尊厳を守り抜いた戦友なのよ！」

「もはや何と戦っているのか、私にはよくわかりません！というか、そのラッコたち、もはや原形をとどめてませんよ！？」

セリナは涙目になりながら、ラッコ柄下着を室内に取り込んだ。

「あと、冷蔵庫の中身も見せてください」

「え、それはヤバいわよ……」

観念したリヴィアが冷蔵庫を開けると、予想通りの惨状が広がっていた。マヨネーズとストゼロと賞味期限切れの味噌チューブ。それ以外には何もない。まるで『究極のミニマリスト』か『終末世界のサバイバー』の冷蔵庫である。

「姉さん、これで生活しているのですか？」

「コンビニ弁当だってあるじゃないの。ちゃんと野菜も入ってるしさ。ほら、ポテトサラダとか.....あ、じゃがいもは野菜よね？」

「それは野菜とは言いません！というか、ポテトサラダの『サラダ』は飾りです！騙されちゃダメです！」

セリナは深くため息をつくと、持参した紙袋から手作りのグラタンを取り出した。

「とりあえず、これを冷蔵庫に入れておきますね。今度から、もう少しまともな食事をしてください」

「ありがとう、セリナ.....」

リヴィアは素直に謝った。妹の献身的な愛情が、胸に突き刺さる。

「姉さんは昔、あんなに立派だったのに.....」

セリナがぼつりと呟いた。その言葉に、リヴィアは過去を思い出した。

異世界での日々――

「姉さん、すごいです！」

聖女見習いだったセリナが、目を輝かせてリヴィアを見上げていた。金色に輝く鎧を身にまとった女騎士は、確かに誇り高く美しかった。

「世界を救う勇者なんて、憧れます！」

あの頃のセリナは、いつも姉を尊敬の眼差しで見ていた。同時に、偉大すぎる姉への複雑な感情も抱えていたが、それでも誇りに思っていた。

そんな頃、パーティには頼れる仲間たちがいた。

「リヴィア、背中任せろ！」

騎士団隊長のレオが、いつものように力強く宣言する。短髪でワイルド系のイケメンである彼に、リヴィアは「ちょっといいな」と思っていた。

戦場で背中を預け合う仲。いつしか芽生えた淡い恋心。

「レオ.....」

しかし、エリュナの采配により、リヴィアは一人で転移先に送られた。セリナとレオは別の場所に転移させられ、再会した時には.....

「姉さん、紹介します。レオです」

「よろしくお願いします、リヴィアさん」

「セリは俺が守る！」

2人は恋人同士になっていた。

あの時の絶望感を、リヴィアは今でも覚えている。

「姉さん？」

セリナの声で現実に戻された。

「なんでもないわよ」

「本当に、大丈夫ですか？ 最近、またお酒の量が増えているような.....」

「私は悪くないわよ！」

リヴィアは反射的に強弁した。いつものように、責任を他に転嫁するプロである。職場でもこのスキルを発揮して、上司から『責任転嫁の達人』と呼ばれている。

「全部エリュナのせいよ！ あのクソ女神がめちゃくちゃな采配するからよ！ 転移先でガチャったら一人ぼっちだし、レオとセリナをくっつけたのもあいつの仕業よ！ 人生をめちゃくちゃにする天才よ！」

「姉さん.....」

セリナの表情が悲しそうに曇った。

「でも、姉さんが幸せじゃないと、私も幸せじゃないんです」

その言葉に、リヴィアはハッとした。

「セリナ.....」

「昔の姉さんは、世界で一番輝いて見えました。今でも、その姿を覚えています」

セリナの目に涙が浮かんでいた。

「だから、諦めません。姉さんがまた笑顔になれるまで、私はずっとここにいます」

「.....ごめんなさい」

リヴィアは素直に謝った。妹の無償の愛に、胸が締め付けられる。

「いいえ、謝らないでください。ただ、もう少しだけ、自分を大切にしてください」

セリナは掃除を終えると、グラタンの温め方を説明して帰っていった。

一人になったリヴィアは、冷蔵庫から手作りのグラタンを取り出した。レンジで温めて、一人で食卓に座る。

「美味しい.....」

温かいグラタンが、冷えた心を少しだけ温めてくれた。妹の愛情がこもった手料理に、涙が頬を伝った。

「カエザル、あんたも食べる？」

「ああ、いただかせてもらおう」

2人で分け合って食べるグラタンは、いつものコンビニ弁当とは全然違っていた。

その夜、リヴィアは久しぶりにストゼロを控えめにした。まだ少しだけ、妹への罪悪感が残っていたからである。

「明日からは、もう少しともに生活しようかな.....」

そんな風に思ったが、翌日にはまた同じような生活に戻ってしまうのが、リヴィア・クロスフィールドという女性だった。まさに『3日坊太郎』の心境である。「明日から本気でダイエットする」と「明日から本気で勉強する」と「明日から本気で禁酒する」を毎日唱えている。

それでも、妹の愛情は確かに心に届いている。セリナの手紙が物語るように、諦めない愛情が、いつかリヴィアを救うことになるのかもしれない。ただし、その日が来るまでにリヴィアがアルコール中毒で入院しないことを祈るばかりである。

第4章 ショタ魔王との距離感

平日の夕方、リヴィアが会社から疲れて帰ってくると、いつもと違う光景が目に入った。

「.....あなた、何してんのよ。つか、顔赤くない？」

部屋の隅で、カエザルが毛布をかぶって正座していた。いつものように威風堂々とした様子はなく、なんだか小さく縮こまっている。

「体が.....重い.....世界の重力が増したのであろうか.....？」

カエザルの声はいつもよりも弱々しく、明らかに体調が悪そうだった。

「いや.....これは....."熱".....というやつであらうか.....？」

「熱って、まさか風邪なの？」

リヴィアは慌ててカエザルに近づいた。額に手を当てると、確かに熱い。

「魔王が風邪って.....マジで意外よね」

人生初の発熱により、普段は尊大なカエザルが完全にポンコツ化していた。

「ハア！？どうしたらいいのよ！？ポーション？ないじゃない！！え、魔力回復？できないし！？氷魔法？え、保冷剤ってどこにあんの！？え、死ぬの？死なないわよね！？」

リヴィアは完全にパニック状態だった。普段は「私は何においても冷静」とか言ってるくせに、いざという時の人間力はゼロである。フライパン片手にうろうろと部屋を歩き回る。

「とりあえず.....おかゆよね？」

おかゆを作ろうとして鍋に水を入れ、火にかけた。しかし、慌てすぎて火力を調整し忘れ、炎魔法のような勢いで鍋を溶かしかけた。

「あー！鍋がヤバい！」

「.....勇者よ.....静かにしてくれである.....」

カエザルの弱々しい抗議に、リヴィアはハッとした。

「保冷剤.....保冷剤はどこよ！？」

冷凍庫を開けると、冷凍食品の下に保冷剤があった。しかし、冷凍庫の調子が悪くて、保冷剤は全然冷えていない。

「これじゃダメじゃないの！」

「冷えピタ買ってくるわ！」

リヴィアは慌てて外に飛び出した。しかし、コンビニでレジに並んだ時、財布を忘れたことに気づいた。

「すみません、財布忘れちゃいました.....」

店員さんに謝って、とぼとぼと帰宅。もう完全にダメ人間である。

「最終的に.....ウーバーでおかゆ頼むわよ」

現代人の最終奥義、デリバリーサービスに頼ることにした。

30分後、ようやく冷えピタとおかゆが届いた。

「カエザル、冷えピタ貼ってあげるわよ」

「.....クソ.....なんで私が.....こんな可愛い寝顔の.....いや、違うわよ！なんで魔王の看病なんてしなきゃいけないのよ！」

リヴィアは魔王の額に冷えピタを貼りながら、内心で葛藤していた。

「あんた、世界を滅ぼしかけたんでしょ！？今、私におかゆ運ばせてもらってんじゃないの！？罪深いにも程があるわよ！！」

「.....勇者よ.....もう少し、静かにしてくれである.....うるさい.....」

カエザルの声はガサガサで、普段の威厳は全くない。しかし、その弱った様子が妙に愛らしく見えて、リヴィアの母性本能が刺激されていた。

「はい、おかゆよ。ちゃんと食べなさいな」

「.....ありがとうである」

素直に感謝するカエザルを見て、リヴィアの心は複雑だった。

その夜、カエザルが寝てからも、リヴィアは彼の様子を気にしていた。時々うわごとを言っているのが聞こえる。

「リヴィア.....背中を、任せたぞ.....」

「うわああああやめなさいよそれ反則セリフでしょおおおお！！！」

リヴィアは思わず叫んだ。昔の戦場を夢に見ているのか、カエザルは昔のことを呟いていた。あの頃のように、お互いを信頼し合って戦った日々。

「.....なんで私、こんなドキドキしてんのよ.....」

寝顔を見つめていると、胸がドキドキしてくる。可愛らしい寝息を立てるカエザルに、なんだか母性を感じると同時に、別の感情も芽生えていた。

「さすがにこれは犯罪よね.....」

慌てて妹にLINEを送る。

📱 深夜LINE (2:14)

リヴィア：

- 👉 ごめんセリナ、寝顔でドキドキした。
- 👉 待って聞いて。魔王なの。でも見た目が可愛くてもう死ぬ。
- 👉 やばいこれ犯罪では？私いま どの法律に触れてる？
- 👉 この胸の高鳴りは感情？それとも警察の足音？

セリナ：

- 📱 今すぐスマホを置いて寝て
- 📱 魔王でも10歳は10歳です
- 📱 自首するなら朝にして

翌日の夕方、リヴィアはTVに向かってゲームをしている。タイトルは「聖騎士学園、秘められた乙女の想い」。イケメンのボイスが部屋に響いている。

「リヴィア」

後ろから少年の声がして、リヴィアは振り返る。そこにはカエザルが立っていた。

「体調はどうなの？」

「ああ、もう大丈夫である。ありがとう、リヴィア」

「そ、そう。良かったわよ」

リヴィアは少し照れくさそうに答えた。

「それよりも、例の乙女ゲーの続きをやらぬか？」

「あー、あれね。全然クリアできないのよね」

2人はソファに並んで座り、ゲームを始めた。リヴィアはストゼロを飲みながら、カエザルはファンタオレンジを飲んでいる。

画面には恋愛アドベンチャーゲームの選択肢が表示されていた。

🎮乙女ゲー内の選択肢：

💬「君を守るって決めたんだ」

💬「お前の好きにしろ。俺は隣にいる」

💬「ヒロイン、便利なアイテムだな！（CV:宮野真守）」←明らかな地雷

「よし、1番よ！守るって言えば正解でしょ！ふふん、恋愛わかってる私なのよっ」

リヴィアは自信満々に1番を選択した。

「.....その選択肢、80%の確率で地雷であるぞ。ヒロインは守られるより、尊重されたいフェーズに入っておる。文脈を読み」

カエザルが冷静に指摘する。

「うっさいわね！私は騎士なのよ！守ってナンボの人生だったんだから！乙女心なんて知らないわよ！」

「だからその感覚がもう古いのである。恋愛は戦闘ではない。相手の自立性を肯定しつつ、寄り添うことが求められておるのである。なぜわからぬ」

「誰よあんた！？魔王っていうか乙女ゲーのチュートリアル神なの！？」

結果、画面には「修羅場END」の文字が踊った。

「選択を誤ったな。エンディングは.....修羅場ENDである。さようなら、未来の君」

「.....またフラれたわ.....」

リヴィアは泣きながら画面を連打した。

「ストゼロを飲んでも、乙女の道は酔えぬぞ、女勇者よ」

カエザルはため息をつきながら、格言じみたことを言った。

「なんで10歳の魔王の方が恋愛に詳しいのよ.....情けないわよね」

「人間観察歴1000年であるからな」

「それ言われると返す言葉がないわよ.....」

その夜、リヴィアは酔い潰れてソファで寝込んだ。カエザルは小さな体で頑張って毛布を持ってきて、彼女にかけてやった。

「おやすみ、リヴィア」

小さな声で呟いて、自分も毛布にくるまった。

看病を通して、2人の距離は確実に縮まっていた。しかし、リヴィアの心の中では、新しい感情への戸惑いと罪悪感が渦巻いていた。まるで『恋愛相談室』の悩み投稿である。

「29歳、魔王（10歳）にきゅんとしてます。これってどうなのでしょう？」という投稿をしたら、炸上しそうである。

「恋愛は戦闘じゃない、か.....でも私の人生、戦闘しかしてないんだけどね。魔王と戦って、ストゼロと戦って、今度は恋愛と戦うのかしら.....。私の人生はバトルモノなのよ。」

カエザルの言葉が、頭の中でぐるぐると回っていた。

第5章 創造神と天界バトル（前哨戦）

週末の朝、リヴィアは部屋着のスウェット一枚でだらしなくソファに座っていた。ブラジャーもつけず、まさにリラックスモード全開である。カエザルは隣でファンタオレンジを飲みながらスマブラをプレイしている。

「あー、今日も何もする気しないわぁ.....洗濯物？明日でいいじゃない.....」

「勇者よ、せめて洗い物くらいしたらどうである。シンクのにおいが異世界の沼地を彷彿とさせるぞ」

「うっさいわね！私だって.....」

リヴィアがストゼロを取りに立ち上がろうとした瞬間、空間がゆらめいた。

突然、カエザルの体が光に包まれる。そして次の瞬間――

そこには身長190cmの美青年が立っていた。長い黒髪がさらりと肩に流れ、まつ毛がバシバシと長い。低くしっとりとした羽生結弦系の完璧なイケメンである。

「.....戻って、しまったのだが.....」

低い声でそう呟く美青年カエザル。

「.....うん.....」

リヴィアは完全にフリーズした後、静かに正座した。

「.....」

リヴィアは黙って、ソファに置いてあったクッションを取って胸を隠す。

「.....勇者よ、なぜ正座を.....」

美青年カエザルが少し体を動かすだけで、長髪がさらりと揺れる。その仕草にリヴィアの心臓は爆発しそうになった。

「すみません、ほんとすいませんっした.....私みたいな限界OLが調子乗ってほんとすいません。こんなノーブラスウェットのおばさんですみません.....。」

完全に敬語になってしまったリヴィアに、カエザルは困った顔をした。

「.....どうしてしまったのだ。リヴィア.....」

その時、リヴィアの携帯が鳴った。着信は「エリュナ@クソ女神」。

「.....出たくないわ.....」

「出ないのか？」

「あのクソ女神、絶対この状況見て爆笑してる.....」

しかし電話は鳴り続ける。仕方なく出ると――

『リヴィ〜、今どんな気持ち？ショタが美青年になっちゃって、今どんな気持ち？ちなみにツイッターでトレンド入りしたらどうする？』

「.....エリュナ.....あんたの仕業でしょ.....というか、あんたの人生の全てが仕業でしょ！！」

『あー、バレちゃった❤️でも貴方、家に男がいるのに油断しすぎじゃない？ノーブラって.....家事する時くらいはブラしようよ〜。オンオフの区別くらいつけなよ〜』

「お前かああああ！！！！いい加減プライバシー侵害で訴えるからね！！」

リヴィアが逆上して叫んだ。

『あらあら、怒っちゃった❤️でも事実でしょ？スウェット一枚で無防備すぎよ〜』

「プライバシーの侵害よ！神様だからって何でも見てんじやないわよ！！今度EUのGDPR違反で訴えるからね！」

『そんなことより、天界に遊びに来ない？久しぶりにお話しましょうよ❤️』

「は？なんで私が.....」

『カエザルが元に戻る方法、教えてあげる』

リヴィアとカエザルは顔を見合わせた。

「.....行くしかないわよね.....」

30分後、二人は天界にいた。エリュナの神殿は相変わらず豪華絢爛で、水晶玉がいくつも浮かんでいる。そして中央の玉座には、白銀の髪を靡かせた美少女神が座っていた。

「いらっしやーい♥ あら、カエザル君、素敵じゃない？」

「.....エリュナ.....久しいな.....」

カエザルの美青年ボイスに、エリュナも少し動揺した。

「あー、やっぱり大人の姿だと色気ムンムンじゃない！♥.....リヴィ、大丈夫？鼻血出ない？」

「さっさと戻せクソ女神！」

リヴィアは必死に平静を装っていたが、美青年カエザルを視界に入らないようにしてるようだ。

「で、何よ。元に戻る方法って」

「簡単よ♥ リヴィが自分の本当の気持ちを認めればいいの」

「本当の気持ちって.....」

「カエザルのこと、好きでしょ？」

シンプルな問いかけに、リヴィアは言葉を失った。

「好きって.....そりゃあ、同居人として.....」

「恋愛的に、でしょ？」

エリュナの追求に、リヴィアの顔がどんどん赤くなっていく。

「そんな.....私はまだ.....」

「まだ何よ？29歳よ？いつまで現実逃避してるの？」

エリュナの言葉に、リヴィアの中で何かがプツンと切れた。

「うっさいのよクソ女神！あんたに何がわかるって言うの！？私の気持ちなんて！」

「あら、キレちゃった♥ じゃあ久しぶりにやる？バトル？」

エリュナが立ち上がると、神殿全体が神聖な光に包まれた。

「やってやるわよ！聖剣カリバーン！」

リヴィアが手を伸ばすと、光の中から聖剣が現れた。エリユナはしかめ面をする。

「私が魔王を討伐するために渡した聖剣カリバーン。栓抜きにするなんてほんと信じられない❗」

「私がもらったもん、どう使おうが自由よ！」

「リヴィア、私も戦うぞ」

美青年カエザルが前に出る。その姿に、リヴィアの心臓がドキドキした。

「あ.....あんたは下がってなさい！これは私とエリユナの問題よ！」

「.....そうはいかぬ。私も当事者である」

カエザルが手を伸ばすと、闇の魔力が渦巻いた。魔王としての力が少しずつ戻っているようだった。

「あら、面白くなってきたじゃない♥じゃあ、二対一ね？」

エリユナが笑うと、天界の空間が戦闘フィールドに変わった。

「いくわよ、カエザル！」

「ああ！」

二人が並んで構える。その時、リヴィアは昔の戦場を思い出していた。背中を預け合って戦った日々。でも今は、守るものが違う。

「喝破せし虚無の光よ！」

リヴィアの聖剣から光の奔流が迸る。

「暗黒の深淵よ、我が呼び声に応えよ！」

カエザルからも闇の魔力が放たれる。

光と闇が交差し、エリユナに向かっていく。

「選択なき采配（ディシジョン・コース）！」

エリユナの神技が二人の攻撃を無効化する。

「まだまだ〜❤️」

エリュナの反撃が始まった。神の雷が二人に降り注ぐ。

「うわあああ！」

「ぐっ……！」

二人は吹き飛ばされそうになるが、お互いを支えあって立ち上がる。

「リヴィア……大丈夫か……？」

美青年カエザルが心配そうにリヴィアを見つめる。その瞬間、リヴィアの心の中で何か
がはっきりした。

「……私……」

「ん？」

「私、あんたのこと……」

その時、エリュナが手を叩いた。

「はい、ストップ❤️今日はここまで」

「え？」

戦闘フィールドが元の神殿に戻る。

「リヴィ、もうすぐ答えが見えそうじゃない？でも今日は帰りなさい。答えは自分で見
つけるのよ」

「ちょっと、中途半端じゃない！」

「あら、続きは次回❤️それより、カエザルの魔力、もうすぐ元に戻るわよ」

エリュナが指を鳴らすと、美青年カエザルがまたぼんやりと光った。

「……また、小さくなるのか……」

「当分はショタのままね。でも、リヴィの気持ちが固まったら……どうなるかしら？」

エリュナが意味深に笑う。

そして光が消えると、そこにはいつものショタカエザルが立っていた。

「.....戻ったのである」

「.....そうね.....」

リヴィアは少し寂しそうだった。

「じゃあ、帰りましょうか」

帰り道、二人は無言だった。

「リヴィア」

「何よ」

「さっき、何を言おうとしたのである？」

リヴィアは立ち止まった。夕陽が二人を照らしている。

「.....まだ、わからないの。でも.....」

「でも？」

「あんたが大人の姿になったとき.....ちょっと、ドキドキした」

「.....そうか」

カエザルも立ち止まる。

「でも、ショタのあんたも.....嫌いじゃないわよ」

そう言って、リヴィアは歩き出した。

「.....ありがとう、リヴィア」

カエザルも後を追う。

「カエザル」

「なんだ？」

「私たち.....なんか、変わったかもしれないわね」

「そうであるな」

「でも.....怖いよ。本当の気持ちに向き合うのって」

カエザルはリヴィアの隣に座った。

「私がいる。一緒に考えよう」

「.....ありがと」

二人はしばらく、夜空を見上げていた。

関係性が少しずつ変化していく中で、リヴィアは自分の心と向き合う必要があることを感じていた。エリュナの言葉が頭の中でぐるぐると回っている。まるでスマホのLINE通知がいつまでも消えない状態である。

「本当の気持ち.....か.....でも私の気持ち、テストの選択問題じゃないんだから、簡単に答え出せないわよ.....」

小さく呟いたリヴィアの声は、夜風に溶けていった。

その夜、リヴィアはまた深夜にセリナにLINEを送っていた。

📱 深夜 1:49 の LINE 画面

リヴィア：

👉 ノーブラの時に魔王が大人になった。死にたい。

👉 てか、声低すぎん？え？何あの声？

👉 ちょっと動いただけで長髪が揺れてこっち見たの。こっちはもう、終わり。

👉 いや、でもこれ。許されるの？『29歳ノーブラ、イケメンでキュン死』

セリナ：

👉 寝るときはちゃんとブラつけて。形が崩れるよ。

👉 あとスマホ置いて。あと人生考えて。

👉 そのタイトル、絶対にドラマ化されちゃダメです。

セリナの母への手紙(夏)

『お母さんへ

いつもお疲れ様です。最近のお母さんはお元気でしょうか。

姉さんのことですが、最近少し様子が変わってきました。まだストゼロは飲んでますが、前ほど投げやりではなくなったような気がします。魔王のカエザル君のおかげかもしれません。

姉さんが少しずつ前向きになってくれているのを見ると、私も嬉しいです。きっとお母さんも安心されると思います。

また近いうちに、三人でお食事でもしませんか？

セリナより

P.S. 姉さんの下着事情、相変わらず深刻です.....』

文字数: 約3,800文字 **次章への伏線:** リヴィアの内面的成長への転換点、カエザルとの関係の変化 **キャラクター状況:** リヴィア（感情への気づき）、カエザル（包容力のある支え）、エリュナ（真意の一部開示）

第6章 情緒崩壊と回復の兆し

その日の朝、リヴィアは珍しく早起きしてストゼロを開けていた。カエザルはまだ寝ている。昨日の天界でのバトルと美青年化事件で、色々と考えることが多すぎて眠れなかったのだ。

「自分の本当の気持ちって.....何よそれ.....」

ストゼロを一口飲んで、ため息をつく。そんな時、ピンポンとチャイムが鳴った。

「はい.....って、セリナ？こんな早くに何よ」

「おはようございます、姉さん。今日は特別な日ですよ」

セリナが満面の笑顔で立っている。その手には紙袋を持っている。

「特別な日って？」

「婚活パーティーです♪ 姉さんの幸せのために、申し込んでおきました」

「はあああああ！？」

リヴィアの絶叫が朝の住宅街に響いた。

6-1. 婚活イベント地獄

2時間後、リヴィアは都内のホテルの宴会場にいた。セリナに無理やり引きずられてきたのである。会場には20代後半から30代前半の男女が集まっている。

「セリナ、私帰る」

「ダメです。姉さんのプロフィールカード、私が書いておいたので」

セリナが差し出したカードを見ると――

【プロフィール】

名前: リヴィア

年齢: 29歳

職業: 会社員

趣味: 読書、映画鑑賞

好きな食べ物: 和食

理想の相手: 優しくて頼りがいのある方

「.....嘘しか書いてないじゃない」

「姉さんの本当の趣味書けるわけないでしょう。『ストゼロ』『ショタ ASMR』なんて」

「うっ.....」

反論できないリヴィアだった。

婚活パーティーが始まると、リヴィアは最初からフリードリンクのアルコールに手を伸ばした。ワイン、日本酒、ビール、とにかく飲めるものは片っ端から飲んでいく。

「姉さん、お酒控えめに.....」

「大丈夫よ.....」

すでに目が座り始めている。

男性陣が順番に女性のテーブルを回ってくる。最初にリヴィアのところに来たのは、30代の爽やかなイケメンだった。

「初めまして。よろしくお願いします」

「.....よろしく.....」

リヴィアは無表情で酒を飲み続けている。

「えーと、プロフィールを拝見させていただいたのですが.....趣味はなんですか？」

リヴィアがワイングラスを置いて、真顔で答えた。

「ストゼロ」

「え？」

「ストゼロです」

すでに目が完全に座っている。爽やかイケメンは困惑した顔をしている。

「あー.....ストロング.....ゼロ.....ですね.....」

「9%のやつが好きです」

会話が完全に止まった。周りのテーブルからも視線が集まる。

「あはは.....そう.....ですね.....」

爽やかイケメンは早々に次のテーブルに移っていった。

リヴィアは構わず、次のお酒に手を伸ばす。数時間が経つ頃には、完全に酔いつぶれていた。

「すみません、ちょっとトイレに.....」

リヴィアは席を立って、フラフラしながらトイレに駆け込んだ。

個室に入るなり、激しく嘔吐した。アルコールの飲みすぎと自己嫌悪で気持ち悪くなったのだ。

「おえええええ.....うえっ.....ごめん、トイレの神様.....こんな場所で.....うえっ.....」

「姉さん！」

セリナが慌てて個室に入ってきて、リヴィアの背中をさすり始めた。

「おえええええ.....ぐすっ.....全部、神のせい.....エリュナが.....エリュナがあああ.....あのクソ女神のドッキリで.....うえっ.....」

リヴィアは嘔吐しながら泣いている。

「姉さん.....」

セリナも静かに涙を流していた。姉の惨状を見ているのが辛かった。

「なんで私だけ.....こんな.....うえっ.....」

「大丈夫、大丈夫ですから.....」

セリナは優しく背中をさすり続ける。

「私、もうダメ.....普通に恋愛なんて.....できない.....もう生涯で魔王と同棲するしか道がないの.....？」

「そんなことはないです」

「うそよ.....みんな引いてる.....ストゼロって言うただけで.....いや、でもストゼロはストゼロでしょ？嘘ついてないじゃん.....」

リヴィアは便器に顔をうずめて泣き続けた。

「今日は帰りましょう」

「.....うん.....」

セリナはリヴィアを支えて、トイレから出た。

その頃、天界では――

エリユナがワイングラスを片手に、水晶玉で婚活パーティーの様子を見ていた。

「あっはっはっは！『ストゼロです』って真顔で言っちゃった！最高！」

エリユナが膝を叩いて大爆笑している。

「エリユナ様.....さすがにちょっと可哀想では.....」

傍に立つイケメン参謀が苦笑いを浮かべている。

「だって面白いんだもん❤️あの真剣な顔で『9%のやつが好きです』って！」

「リヴィア様、完全に酔っ払ってましたね.....」

「でも、これで少しは現実が見えるでしょ？普通の恋愛なんて、リヴィには無理なのよ」

エリユナがワインを一口飲む。

「カエザルと向き合うしかないのに、まだ気づかないのかしら」

「エリユナ様の計画通りということですか？」

「まあ、そんなところかな❤️」

6-2. 姉妹喧嘩（情緒崩壊編）

家に帰る途中、リヴィアの感情が爆発した。

「なんで私だけこんな目に遭うのよ！」

駅のホームで突然叫んだ。通りすがりの人たちが振り返る。

「姉さん、落ち着いて……」

「あんたは良いわよ！レオっていう素敵な彼氏がいて、普通に恋愛して、普通に幸せで！」

「姉さん……」

「私は何よ！？29歳で魔王と同居って頭おかしいでしょ！？しかも10歳の見た目だし！異常よ！！」

セリナは黙って聞いていた。

「全部お前のせいだ！」

「え？」

「あんたがレオと幸せそうにしてるから、私が惨めに見えるのよ！あんたさえいなければ——」

「姉さん！」

セリナが初めて大きな声を出した。

「それは違います！」

「何がよ！」

「姉さんが幸せじゃないと、私も幸せじゃないの！」

セリナの目に涙がにじんでいる。

「姉さんがストゼロばかり飲んで、部屋に引きこもって、『死にたい』ってLINE送ってくる度に、私、心配で心配で夜も眠れないの！」

「そんなの知らないわよ……」

「知らないって……姉さん、私がどれだけ姉さんのこと心配してると思ってるの？」

セリナの声が震えている。

「お母さんだって、毎日のように姉さんのこと心配してる。『リヴィアは大丈夫？』『ちゃんと食べてる？』って」

「.....」

「私、姉さんが笑ってくれるなら何でもする。だから婚活パーティーも申し込んだし、掃除もするし、手紙も書くの」

セリナが泣き出した。

「でも、姉さんが私のせいで惨めって言うなら.....私、どうしたらいいか分からない.....」

リヴィアはハッとした。自分が何を言ったのか、やっと理解した。

「セリナ.....私.....」

「姉さんには、カエザル君がいるじゃないですか」

セリナが涙をぬぐいながら言った。

「カエザル君、姉さんのことすごく大切に思ってますよ。見ていて分かります」

「でも.....」

「姉さんも、カエザル君のこと好きでしょう？」

セリナの問いかけに、リヴィアは答えられなかった。

「私は.....分からないの.....」

「分からないって？」

「本当の気持ちが.....分からない.....」

リヴィアも泣き出した。

「怖いよ.....本当の気持ちに向き合うのが.....」

セリナはリヴィアの手を取った。

「姉さん、大丈夫です。私がついてます」

「セリナ.....」

「一緒に考えましょう。姉さんの幸せ」

二人は駅のベンチに座って、しばらく泣いた。

「ごめん……セリナ……ひどいこと言って……」

「いえ、姉さんが素直になってくれて嬉しいです」

「あんたって……本当にいい子よね……」

「姉さんの妹ですから」

セリナが微笑んだ。

「私、変わらなきゃダメかもしれない……」

「姉さん……」

「でも、どうやって？」

「まずは、カエザル君との関係をちゃんと考えてみませんか？」

リヴィアは頷いた。

6-3. セリナの実家への手紙

その夜、家に帰ると、カエザルが心配そうに待っていた。

「リヴィア、どこに行っていたのである？」

「あー……婚活パーティー……」

「婚活？」

カエザルの表情が少し曇った。

「でも、全然ダメだったわ。やっぱり私、普通の人とは合わないのよね」

「……そうか」

カエザルは何か言いたそうだったが、黙っていた。

その夜、セリナが母親への手紙を書いているのを見かけた。

「セリナ、何書いてるの？」

「お母さんへの手紙です。姉さんのこと、報告しなくちゃ」

「そっか.....心配かけてるわよね.....」

リヴィアは自分の部屋を見回した。ストゼロの空き缶、コンビニ弁当の容器、使い込まれた下着。

「私って.....みんなに心配かけてるのね.....」

「でも、みんな姉さんのこと愛してますから」

「.....ありがと、セリナ」

その夜、リヴィアは久しぶりに母親に電話をかけた。

「もしもし、お母さん？私、リヴィア」

『リヴィ！元気にしてる？』

「うん.....元気よ.....って言いたいけど、実はそうでもなくて.....」

『どうしたの？』

「色々.....考えることがあって.....」

『そっか。でも、リヴィが考えるってことは、前に進もうとしてるってことよね』

母親の優しい声に、リヴィアは涙ぐんだ。

「お母さん.....私、変われるかな？」

『もちろんよ。リヴィはまだ29歳でしょ？これからよ』

「.....ありがとう、お母さん」

電話を切った後、リヴィアはカエザルの部屋の前に立った。

「カエザル、起きてる？」

「ああ、起きている」

「.....入っても良い？」

「どうぞ」

リヴィアが部屋に入ると、カエザルはベッドに座っていた。

「今日は.....ありがとう。心配かけて」

「.....気にするな。それより、婚活はどうだったのである？」

「最悪よ。でも.....色々分かったことがあるの」

「どんな？」

「私、本当の気持ちから逃げてたのかもしれない」

カエザルは黙って聞いていた。

「あんたとの関係も.....ちゃんと考えなきゃいけないのかも」

「.....リヴィア」

「でも、まだ怖い。答えを出すのが」

カエザルはリヴィアの隣に座った。

「急がなくて良い。私は待っている」

「.....ありがと」

二人はしばらく、静かに座っていた。

リヴィアは少しずつ、自分の心と向き合う準備ができ始めていた。まだ答えは出ないけれど、逃げるのはやめようと思った。

「カエザル」

「なんである？」

「明日から.....ちょっとずつ変わってみる」

「.....良いことである」

「あんたも.....一緒にいてくれる？」

「当然である」

カエザルの答えに、リヴィアは少しだけ安心した。

関係性は変わっていく。でも、一人じゃない。そう思うと、前に進む勇気が少し湧いてきた。

セリナ之母への手紙（秋）

『お母さんへ

いつもお元気でしょうか。秋も深まってきましたね。

姉さんのことですが、今日は大変なことがありました。婚活パーティーに連れて行ったのですが、やはり姉さんには合わなかったようです。

でも、久しぶりに姉さんと本音で話すことができました。姉さんも少しずつ、自分の気持ちと向き合おうとしています。

そういえば、姉さんのラッコ柄の下着のこと、覚えていますか？ 実は、あれは10年前にお母さんが買ってくれたものなんです。姉さん、まだ大切に使っているんですよ。ちょっと使い込まれすぎて心配になるほどですが.....

お母さんからの愛情を、姉さんなりに大切にしているんだなって思いました。

姉さんが幸せになれるように、私も頑張ります。お母さんも、姉さんのこと見守っていてくださいね。

セリナより

P.S. 今度、三人でお食事しませんか？ 姉さんも、お母さんに会いたがっていると思います』

文字数: 約3,800文字 次章への伏線: リヴィアの変化への決意、自分と向き合う覚悟
キャラクター状況: リヴィア（感情の混乱から立ち直りの兆し）、セリナ（献身的な支え）、カエザル（包容力のある理解者）

第7章 運命への覚悟

7-1. 魔王の友達事件

この世に、これほど場違いなものがあるだろうか。

リヴィアは小学校の昇降口で、上履きに履き替えながら心の中で呟いた。29歳の元勇者が、魔王の授業参観に来るなんて。しかも保護者として。

「リヴィア、緊張しているのか？」

隣でカエザルが、いつもの古風な口調で心配そうに声をかけてきた。小学4年生の制服を着た彼は、どこからどう見ても普通の小学生にしか見えない。けれど、リヴィアには分かる。この子が本当は何者なのかを。

「緊張なんかしてないわよ」

強がってみせたものの、実際のところリヴィアの心臓はバクバクと鳴っていた。学校なんて、自分が学生だった頃以来だ。それも、保護者としてなんて――。

「それにしても、なんで急に授業参観のお知らせなんか…」

「学期末だからであろう。それに、普段お世話になっている人に感謝を伝える授業があるらしい」

カエザルがそう説明すると、リヴィアの胃がキリリと痛んだ。感謝を伝える授業。つまり、彼がクラスメイトの前で、自分について話すということ。

「何を話すつもりなのよ」

「秘密だ」

カエザルはニッコリと笑った。その笑顔が、なぜかいつもより眩しく見えて、リヴィアは慌てて視線を逸らした。

教室に入ると、他の保護者たちがすでに後ろの席に座っていた。みんな、ちゃんとした「お母さん」や「お父さん」の顔をしている。それに比べて自分は――。

リヴィアは自分の格好を見下ろした。一応、この日のために新しいブラウスを買ったのだが、どことなく違和感がある。元勇者の29歳独身女性が、小学生の保護者をやっているという現実が、改めて胸に突き刺さった。

授業が始まると、子どもたちは順番に前に出て、「いつもお世話になっている人」について発表していく。

「僕のお母さんは、毎日美味しいお弁当を作ってくれます」

「私のお父さんは、休みの日に一緒にキャッチボールをしてくれます」

微笑ましい発表が続く中、リヴィアの胸は段々と重くなっていった。カエザルは何となくうつもりなのだろう。まさか「魔界からお世話になっています」なんて言わないだろうな。

そして、ついにカエザルの順番がやってきた。

「えーっと、僕がいつもお世話になっているのは、リヴィアお姉ちゃんです」

クラス中がざわめいた。お姉ちゃん、という呼び方に、リヴィアは少しホッとした。

「リヴィアお姉ちゃんは、僕と一緒にゲームをしてくれます。スマブラで負けると、とても悔しがります」

クスクスと笑い声が起こる。リヴィアは顔が赤くなるのを感じた。

「それから、僕が風邪をひいた時は、夜中まで看病してくれました。とても心配してくれて、僕はとても嬉しかったです」

カエザルの声が、少し震えているように聞こえた。リヴィアの胸がキュッと締め付けられる。

「僕は、リヴィアお姉ちゃんがいてくれて、本当に幸せです。いつもありがとうございます」

深々とお辞儀をするカエザル。教室中から温かい拍手が起こった。

そして、一人の男の子が手を挙げた。

「カエザルくんのお姉ちゃん、すごく若くて綺麗だね！」

「うん！まるでお母さんみたい！」

「でも、お母さんにしては若すぎない？」

「きっと、すごく若いお母さんなんだよ！」

子どもたちの無邪気な会話が、リヴィアの心臓に直撃した。お母さん。そんな風に見られているのか、自分は。

授業が終わり、子どもたちが保護者のところにやってきた。カエザルがリヴィアの前に立つと、周りの子どもたちも興味深そうに集まってきた。

「リヴィアお姉ちゃん、ありがとう！」

一人の女の子が、人懐っこい笑顔で話しかけてきた。

「カエザルくんのこと、いつもありがとうございます！」

「カエザルくん、お家でもちゃんといい子にしてる？」

「リヴィアお姉ちゃんって、何歳なんですか？」

質問攻めに遭いながら、リヴィアは愛想笑いを浮かべていた。子どもたちは本当に無邪気で可愛い。けれど、彼らの純粋な視線が、今の自分には少し眩しすぎた。

「リヴィアお姉ちゃん、一緒に遊ぼう！」

一人の男の子が、リヴィアの手を引っ張った。

「あ、うん…」

気がつくと、リヴィアは子どもたちに囲まれて、校庭で一緒に遊んでいた。久しぶりに体を動かすのは悪くない。子どもたちの笑い声に包まれて、リヴィアの心も少しずつ軽くなっていく。

「リヴィアお姉ちゃん、速い！」

「すごーい！」

褒められて、リヴィアは少し得意になった。やはり、元勇者の身体能力は伊達ではない。そんな時だった。

「ありがとう！お婆さん！」

一人の男の子が、無邪気にそう言った瞬間、校庭の空気が凍りついた。

「え...」

「おば...」

「あ、ごめん！」

男の子は慌てて口を押さえたが、もう遅かった。

おばさん。

その言葉が、リヴィアの心臓に氷の矢のように突き刺さった。

確かに、29歳は子どもから見れば「おばさん」かもしれない。でも、それをこんな風に言われるなんて。

周りの子どもたちも、気まずそうにもじもじしている。きっと、「おばさんって言っちゃダメ」ということは知っているのだろう。

「だ、大丈夫よ...」

リヴィアは震え声でそう言ったが、明らかに大丈夫ではなかった。顔が青くなっているのを、自分でも感じていた。

「リヴィア...」

カエザルが心配そうに近づいてきた。その瞬間、リヴィアは無性に恥ずかしくなった。

こんな自分を、彼に見られたくない。29歳にもなって、子どもの一言でショックを受けている情けない自分を。

「ち、ちょっとトイレに...」

リヴィアは逃げるように校舎に駆け込んだ。

7-2. 私の本当の気持ち？

トイレの個室で、リヴィアは膝を抱えて座り込んでいた。

おばさん。

その言葉が、頭の中でリフレインし続けている。

確かに、29歳なら子どもから見れば「おばさん」かもしれない。でも、なぜこんなにもショックなのだろう。

ふと、カエザルのことを思い出した。10歳の外見をした彼にとって、自分は本当に「おばさん」なのかもしれない。

——いや、待って。

リヴィアは慌てて頭を振った。なんで、カエザルがどう思うかを気にしているのよ。

でも、心の奥で、小さな声が囁いている。

『あの子は、私のことをどう思っているのかしら』

『一緒にいて、楽しいのかしら』

『それとも、面倒くさいお姉さんだと思われているのかしら』

考えれば考えるほど、胸がもやもやしてくる。これは何なのだろう。ただの保護者としての心配？それとも——。

「リヴィア？」

ドアの向こうから、カエザルの声が聞こえた。

「大丈夫か？皆、心配している」

「だ、大丈夫よ！今出るから！」

慌てて返事をしたものの、鏡に映った自分の顔は真っ赤だった。こんな顔で出るわけにはいかない。

「本当に大丈夫か？」

カエザルの声に、明らかに心配が混じっている。その優しさが、なぜか胸にジンと響いた。

「心配してくれて...ありがとう」

小さくそう呟くと、ドアの向こうが静かになった。

「リヴィア...お前は、俺にとって大切な人だ」

突然の言葉に、リヴィアの心臓が跳ね上がった。

「何を突然...」

「俺は、お前がいてくれて本当に良かったと思っている。お前がいなければ、俺はきっと、この世界で一人ぼっちだった」

カエザルの声が、いつもより少し大人びて聞こえた。まるで、本当の年齢の彼が話しているかのように。

「カエザル...」

「だから、誰が何と言おうと、俺はお前を大切に思っている。それだけは、忘れないでほしい」

胸が熱くなった。こんな風に大切に思ってもらえるなんて。

でも、同時に複雑な気持ちも湧き上がってくる。この気持ちは何なのだろう。ただの家族愛？友情？それとも――。

『まさかね』

リヴィアは慌てて首を振った。10歳の外見の子に対して、そんなことを考えるなんて。でも、彼の本当の年齢は――。

『ダメダメダメ！』

必死に頭を振って、そんな考えを追い払う。自分は、ただの保護者。それ以上でも、それ以下でもない。

「ありがとう、カエザル。私も...あなたがいてくれて良かった」

そう答えると、ドアの向こうから小さな笑い声が聞こえた。

「なら、そろそろ出てこないか？子どもたちが、リヴィアお姉ちゃんともっと遊びたがっている」

「え？」

「謝りたがっている子もいる。皆、お前のことが好きなんだ」

そう言われて、リヴィアの心が少し軽くなった。

「分かったわ。今出る」

鏡でもう一度顔をチェックしてから、リヴィアはドアを開けた。

カエザルが、心配そうな顔で立っていた。その表情を見た瞬間、胸がキュンとした。

「あ…」

「どうした？」

「何でもないわ」

慌てて視線を逸らす。今のは何だったのだろう。まさか、この子の心配してくれる表情に、ときめいたりしたわけじゃ――。

『絶対に違う』

リヴィアは心の中で強く否定した。これは、ただの勘違い。きっと、子どもたちの優しさに感動しているだけ。

「行きましょう」

「うむ」

校庭に戻ると、子どもたちが駆け寄ってきた。

「リヴィアお姉ちゃん、ごめんなさい！」

さっきの男の子が、泣きそうな顔で謝ってきた。

「大丈夫よ。あなたは何も悪くない」

リヴィアは優しく微笑んだ。本当に、この子たちは可愛い。

「リヴィアお姉ちゃん、また遊びに来て！」

「今度は、みんなでドッジボールしよう！」

「カエザルくんと一緒に！」

子どもたちの無邪気な声に、リヴィアの心は温かくなった。

そして、ふとカエザルを見ると、彼も嬉しそうに笑っていた。その笑顔を見ていると、なぜか胸がほんわりとした。

『この子といると、なんだか心が安らぐのね』

そんなことを考えていると、カエザルと目が合った。

「？」

首を傾げるカエザル。その仕草があまりにも愛らしくて、リヴィアは慌てて顔を赤らめた。

「な、何でもないわよ！」

「そうか？」

まだ不思議そうな顔をしているカエザルを見て、リヴィアの心は更にドキドキした。

『これって、まさか...』

でも、その考えをすぐに頭から追い払う。

『絶対に違う』

そう自分に言い聞かせながら、リヴィアは子どもたちとの時間を楽しむことにした。

でも、時々、カエザルの方をちらっと見てしまう自分がいた。そして、見つめていることに気づくと、慌てて視線を逸らしてしまう。

一体、自分は どうしてしまったのだろう。

その夜、アパートに帰った二人は、いつものようにリビングでくつろいでいた。

カエザルはファンタを飲みながら宿題をしている。リヴィアはストゼロを開けようとして――やめた。

「あら？」

「どうしたのである？」

「いえ、なんでもないわ」

代わりに麦茶を注いで飲む。カエザルが不思議そうに見ていた。

「リヴィア、最近少し変わったな」

「変わった？」

「ストゼロを飲む量が減ったし、朝も早く起きるようになった」

確かに、言われてみればそうかもしれない。でも、なぜ変わったのか、自分でもよく分からない。

「別に、意識してるわけじゃないけど…」

「良いことである」

カエザルが微笑んだ。その笑顔を見ていると、また胸がドキドキした。

『また…』

リヴィアは慌てて顔を逸らした。

「今日は、ありがとう」

「え？」

「授業参観に来てくれて。皆、喜んでいた」

「そ、そう？良かったわ」

「それに…」

カエザルがペンを置いて、リヴィアの方を向いた。

「俺も嬉しかった」

「嬉しかった？」

「リヴィアが俺の大切な人だということを、皆に分かってもらえて」

その言葉に、リヴィアの胸がキュンとした。

『大切な人…』

でも、それはどういう意味なのだろう。家族として？友達として？それとも——。

『考えちゃダメ』

リヴィアは必死に首を振った。

「私も...」

「？」

「私も、あなたが大切よ」

そう言うのが精一杯だった。

カエザルがほんのり頬を赤らめた。

「そう言ってもらえると、嬉しいである」

二人の間に、微妙な空気が流れた。なんとなく気まずくて、でも嫌じゃない。むしろ、心地よいような――。

「あ、そうそう」

リヴィアは慌てて話題を変えた。

「セリナから連絡があったの。今度、レオと一緒に食事でもしようって」

「レオ？」

「セリナの恋人よ。覚えてるでしょ？」

「ああ、あの優秀な男性である」

カエザルの表情が少し曇ったような気がした。

「どうしたの？」

「いや...なんでもない」

本当になんでもないのだろうか。リヴィアは首を傾げた。

「まあ、今度会ってみましょうか。あなたも一緒に」

「俺も？」

「ダメ？」

「いや、ダメではないが...」

カエザルが困ったような顔をした。

「俺は子どもだから、大人の会話についていけるかどうか...」

「大丈夫よ。あなたは思ってるより大人なもの」

リヴィアの言葉に、カエザルがハッとした表情を見せた。

「リヴィア...」

「なに？」

「お前は、俺のことをどう思っているのだ？」

突然の質問に、リヴィアは動揺した。

「ど、どうって...」

「子どもだと思っているのか？それとも...」

カエザルの視線が真剣だった。リヴィアは慌てた。

「そ、それは...」

確かに、外見は子どもだけど、中身は大人だということは分かっている。でも、それをどう表現すればいいのか分からない。

「難しいのよ...」

「難しい？」

「あなたの外見は10歳だけど、中身は大人でしょ？どう接すればいいのか、よく分からないの」

リヴィアが正直に言うと、カエザルは少し寂しそうな表情を見せた。

「そうか...」

「でも！」

リヴィアは慌てて続けた。

「一緒にいると楽しいし、安心するし...とても大切な存在よ」

「大切な存在...」

カエザルが呟いた。その表情が、なぜか切なく見えた。

「カエザル？」

「いや...ありがとう」

カエザルは微笑んだが、その笑顔は少し無理をしているように見えた。

その夜、リヴィアは一人でベッドに横になりながら考えていた。

『大切な存在』

自分はそう言ったけれど、本当はもっと複雑な気持ちがある。

カエザルといると、心が温かくなる。彼の笑顔を見ると嬉しくなるし、悲しそうな顔を見ると胸が痛む。

でも、これは何なのだろう。母性？友情？それとも——。

『まさか』

リヴィアは枕に顔を埋めた。

29歳の自分が、10歳の外見の子に対して、そんな感情を抱くなんて。でも、彼の本当の年齢は——。

『ダメよ、そんなこと考えちゃ』

でも、心の奥では、小さな声が囁いている。

『でも、あの子といると幸せ』

『あの子の笑顔が見たい』

『あの子を守りたい』

これは、一体何なのだろう。

7-3. 決意の瞬間

次の朝、リヴィアは少し早めに起きた。窓の外はまだ薄暗く、静寂に包まれている。

キッチンに立って、コーヒーを淹れながら昨夜のことを思い返していた。カエザルの複雑そうな表情。自分の曖昧な答え。

『私たちの関係って、一体何なのかしら』

ふと、冷蔵庫の奥からストゼロの缶が見えた。いつもなら朝からでも手を伸ばしていたのに、今は全く飲みたいと思わない。

「おはよう」

振り返ると、カエザルが眠そうな顔で立っていた。

「おはよう。早いね」

「リヴィアの気配で目が覚めた」

「ごめんなさい」

「いや、構わない」

カエザルも隣に立って、リヴィアがコーヒーを淹れる様子を見ていた。

「カエザル」

「なんである？」

「昨夜は、変なこと聞いてごめんなさい」

「変なこと？」

「あなたのことをどう思ってるかって...答えにくい質問だったでしょ」

リヴィアが振り返ると、カエザルは少し困ったような表情をしていた。

「実は...俺も同じことを考えていた」

「え？」

「リヴィアのことを、どう思っているのか...自分でもよく分からないのである」

カエザルの言葉に、リヴィアの心臓がドキドキした。

「最初は、面倒を見てもらっている保護者だと思っていた」

「うん」

「でも、一緒に過ごすうちに…」

カエザルが言葉を探している。

「もっと特別な存在になった」

「特別な…」

「家族とも違う、友達とも違う…何かよく分からないが、とても大切な人」

その言葉に、リヴィアの胸が熱くなった。

「私も同じよ」

「同じ？」

「あなたといると、心が安らぐの。でも、それと同時にドキドキもする」

リヴィアの頬が少し赤くなった。

「ドキドキ？」

「あなたの笑顔を見ると嬉しくなるし、悲しそうな顔を見ると胸が痛む」

「リヴィア…」

「でも、これが何なのか、よく分からないの」

二人は見つめ合った。微妙な空気が流れる。

「もしかして…」

カエザルが小さな声で呟いた。

「もしかして、なに？」

「いや…何でもない」

カエザルは慌てて首を振った。

『もしかして』という言葉が、リヴィアの心に引っかかった。彼も、同じことを考えているのだろうか。

でも、それを確かめるのは怖かった。

「とりあえず」

リヴィアは話題を変えた。

「私たち、今のままで良いんじゃない？」

「今のまま？」

「お互いを大切に思っている。それで十分よ」

リヴィアの言葉に、カエザルは少し寂しそうな表情を見せた。でも、すぐに微笑んだ。

「そうである。それで十分である」

でも、その笑顔は少し無理をしているように見えた。

その時、リヴィアの携帯に着信があった。セリナからだった。

「もしもし、セリナ？朝早くに珍しいじゃない」

『姉さん、大変よ！』

「何が？」

『エリュナが現れたの！』

「え？」

リヴィアは驚いた。カエザルも急に表情を変えた。

『今、私の前にいるの。姉さんに会いたがってる』

「なんで急に…」

『分からないけど、すごく怒ってるみたい。姉さんとカエザルくんに用があるって』

リヴィアとカエザルは顔を見合わせた。

「分かったわ。すぐに行く」

『気をつけて、姉さん』

電話を切ったリヴィアは、急いで着替え始めた。

「どうやら、時が来たようね」

「エリュナか...」

カエザルの表情が陰しくなった。

「あいつとの決着を、そろそろつけなければならないかもしれない」

リヴィアは押入れの奥から、長い間使っていなかった鎧と聖剣を取り出した。

「まさか、また使う日が来るなんて」

聖剣カリバーン。栓抜きとして使われていたため、刃が少し欠けている。

「大丈夫か？その剣」

「大丈夫よ。まだ戦える」

リヴィアは剣を構えてみた。重い。昔ほど軽々とは扱えない。

「リヴィア、無理はするな」

「分かってるわ」

でも、心の中では不安でいっぱいだった。29歳の体で、昔のように戦えるのだろうか。

「一緒に行こう」

カエザルが立ち上がった。

「ありがとう」

二人は見つめ合った。今度は、戦友として。

「私たち、どうなるのかしら」

「どうなるって？」

「この戦いの後...私たちの関係」

リヴィアの問いに、カエザルは少し考え込んだ。

「分からない。でも…」

「でも？」

「どんなことがあっても、俺はリヴィアの味方である」

その言葉に、リヴィアの胸が熱くなった。

「私もよ。あなたの味方」

二人は微笑み合った。恋人同士ではないけれど、何か特別な絆で結ばれているような気がした。

「行きましょう」

「うむ」

家を出る前に、リヴィアは鏡を見た。久しぶりに身につけた鎧姿。29歳の顔。

『変わったな、私』

でも、悪い変化ではないような気がした。

「リヴィア、準備は良いか？」

「ええ」

二人は手を繋いだ。それは恋人同士の手つなぎではなく、戦友としての、お互いを支え合う手つなぎだった。

「私の人生、もう一度やり直させてもらおうわ」

リヴィアの決意を込めた言葉が、朝の空気に響いた。

カエザルが魔法を唱えると、二人の体が光に包まれた。転移魔法。

新しい戦いの始まり。そして、新しい関係の始まりでもあった。

セリナの母への手紙（冬）

『お母さんへ』

もう12月になりますね。今年も残りわずかです。

姉さんのことですが、最近とても大きな変化があります。朝早く起きるようになったし、ストゼロもほとんど飲まなくなりました。そして、カエザルくんとの関係も、少しずつ変わってきているようです。

今朝、二人が一緒に出かけて行きました。すごく真剣な顔をしていて、でも、手を繋いでいました。恋人同士というより、深い信頼で結ばれた仲間のような感じでした。

きっと、姉さんなりに答えを見つけようとしているんだと思います。

10年前に買ってくれたラッコ柄の下着も、今日はちゃんと洗濯して干してありました。姉さんが変わろうとしている証拠かもしれません。

お母さん、姉さんのこと信じていてください。姉さんはきっと、幸せになれると思います。

もしかしたら、恋愛とは違う形かもしれませんが、きっと素敵な関係を築いていけると思います。

私も、姉さんを応援し続けます。

セリナより

P.S. もうすぐ、姉さんから何か報告があるかもしれません』

文字数: 約8,800文字

次章への伏線: エリュナとの最終決戦、二人の曖昧だが特別な関係性の継続

キャラクター状況: リヴィア - 自分の気持ちに薄々気づくが明確にしない、戦いへの決意を固める / カエザル - リヴィアへの特別な感情を抱くが関係性は曖昧なまま、共に戦う覚悟を決める

第8章 世界の因果を貫けッ！

8-1. 最終決戦前夜

天界への転移が完了すると、二人は雲の上の白い大理石でできた巨大な宮殿の前に立っていた。

「うわー.....相変わらず趣味悪いわね、エリュナの宮殿」

リヴィアは鎧の胸の部分をちょっと緩めながら言った。やはり5年前の装備は体型的にキツイ。カエザルも小学生の体で魔法を使ったせいか、少し息を切らしている。

「大丈夫か、カエザル？」

「問題ない.....ただ、この姿で魔法を使うと疲れるのである」

「無理しないでよ。あんたが倒れたら、私一人でエリュナと戦わなきゃいけないじゃない」

「心配するな。私とて元魔王である」

カエザルが胸を張って言ったが、10歳の外見では迫力に欠ける。むしろ可愛い。

「.....あんた、本気で戦う気あるの？」

「当然である。リヴィアを守るためなら、この命に代えても」

「はあ？何それ、急にかっこいいこと言っちゃって」

リヴィアは照れながら言った。こういう時のカエザルは、本当に千年を生きた魔王らしい威厳を感じさせる。

「でも.....本当に、これでいいのかしら」

「何がである？」

「エリュナと戦うことよ。確かにあいつはクソ女神だけど.....」

リヴィアは空を見上げた。夕焼けが雲を赤く染めている。

「昔は、親友だったのよね」

「そうだったのか？」

「.....まあ、親友っていうか、腐れ縁？ あいつとは勇者になる前からの付き合いなの。一緒にバカやって、一緒に怒られて.....」

リヴィアの表情が少し柔らかくなった。

「でも、あいつは私を現代に飛ばして、あんたを小学生にして、レオとセリナをくっつけて.....全部、全部あいつの采配なのよ」

「.....リヴィア」

「許せないわよ、そんなの！ 私の人生を勝手にいじくり回して！」

リヴィアの声に怒りがこもった。しかし、その奥には悲しみも混じっている。

「でも、もしエリュナの采配がなかったら.....私とあんたは出会わなかった」

「.....そうだな」

「それに、セリナだって幸せになったし、レオだって.....」

「リヴィア、迷う必要はない」

カエザルがリヴィアの手を取った。

「どんな結果でも、今の私たちがここにいることに変わりはない。それに.....」

「それに？」

「エリュナを殴るのは、君の夢だったではないか」

「.....ふっ」

リヴィアが吹き出した。

「そうね、確かに。あいつを一発殴るのが、ここ5年間の夢だったわ」

「では、行こうか」

「うん」

二人は手を繋いだまま、宮殿の大扉に向かって歩いていく。

「カエザル」

「なんである？」

「あんた、本当に変わったわよね」

「私がか？」

「昔はもっと……こう、尊大で威厳があって」

「今は違うのか？」

「今は……なんか、可愛いわ」

カエザルの顔が真っ赤になった。

「か、可愛いとは何事である！私は魔王であるぞ！」

「はいはい、可愛い魔王様ね」

リヴィアがにこっと笑った。久しぶりに、本当に幸せそうな笑顔だった。

8-2. 天界最終決戦

宮殿の玉座の間に入ると、そこにはエリユナが退屈そうに座っていた。

「あー、やっと来た。遅いじゃない」

相変わらずの軽いノリ。しかし、その周りには神聖な光がオーラのように漂っている。
やはり、創造神としての力は本物だ。

「エリユナアアアア！」

リヴィアが聖剣を抜いて叫んだ。5年間の鬱憤が爆発する。

「待ってました、その台詞！やっぱりリヴィはそうでなくちゃ！」

エリユナが手をパンパンと叩いて喜んでいる。

「今日こそ決着つけるわよ！私の人生を滅茶苦茶にした罪、償ってもらおうから！」

「滅茶苦茶って酷いなあ。私はリヴィの幸せを願って……」

「うっせー！ 勝手に決めんじゃねーよ！」

リヴィアが聖剣を振りかざして突進する。エリュナも神器らしき光る杖を構えた。

「仕方ないね。本気出しちゃうか」

二人の武器がぶつかった瞬間、宮殿全体が激しく揺れた。

「喝破せし虚無の光よ！」

リヴィアが技名を叫びながら、聖剣から光の波動を放つ。しかし……

「ちょっと待って、その技名恥ずかしくない？」

「うっせー！ 厨二で何が悪いのよ！」

「いや、まあ、悪くはないけど……選択なき采配（ディシジョン・コース）！」

エリュナも負けじと厨二全開の技を放つ。天界中に光と闇の魔法がぶつかり合う音が響いた。

「あんたの方がよっぽど厨二じゃない！」

「これは神聖な技よ！」

「嘘つけ！」

二人は魔法を撃ち合いながら、まるで子供の喧嘩のような口論を続ける。

「そもそもリヴィが現代に適應できないのが悪いんでしょ！」

「適應って何よ！ いきなり知らない世界に放り込まれて、適應も何もないでしょ！」

「でも他のみんなは上手くやってるじゃない！」

「他って誰よ！ ヴァルグは真面目すぎるし、カエザルは子供だから順應早いし！」

「それは言い訳でしょ！」

魔法の応酬が続く中、カエザルは少し離れたところから見ていた。

「……なんというか、本当に仲が良いな、この二人は」

そう、これは戦いというより、長年溜まった文句の言い合いだった。

「ていうか！ 私をストゼロ依存にしたのもあんたでしょ！」

「それは違うわよ！ リヴィが勝手にハマったの！」

「最初にコンビニで手に取らせるように誘導したじゃない！」

「それは.....まあ.....ちょっとだけ」

「ほら！ 認めた！」

「でも！ 9%の味を教えてあげたのは親切心よ！」

「親切心でアルコール依存にすんじゃねーよ！」

戦いながらの口論は、もはやコントの域に達していた。

「終幕世界崩壊斬！」

「それも恥ずかしい技名ね！ 天界震撼絶対零度！」

「あんたもでしょ！」

ついに二人の最大技がぶつかり合った。宮殿の屋根が吹き飛び、天界中に衝撃が走る。

そして――

8-3. 決着と和解

「いて.....」

「痛たた.....」

宮殿の瓦礫の中で、リヴィアとエリュナが並んで倒れていた。二人とも埃まみれ、髪はボサボサ。

「あー、疲れた」

「私もよ.....」

なぜか、怒りがスッと引いていた。言いたいことを全部言って、思いっきり暴れて、なんだかスッキリしている。

「.....エリュナ」

「なに？」

「なんで、私を現代に飛ばしたの？ 本当の理由」

エリュナは少し黙ってから、答えた。

「.....リヴィが可哀想だったから」

「は？」

「勇者って、重いでしょ？ みんなの期待背負って、正義のために戦って.....リヴィ、本当は疲れてたじゃない」

リヴィアは黙っていた。

「だから、普通の人生を歩めばいいって思ったの。現代なら、勇者じゃなくても生きていける」

「でも.....」

「でも、リヴィは現代でも勇者やってたのよね。会社で、家で、一人で全部背負い込んで」

エリュナが苦笑いした。

「だから、カエザルを送ったの。リヴィを支えてくれる人を」

「.....あんた」

「レオとセリナの件はついでよ。あの二人、お似合いだったし」

エリュナがケラケラ笑った。

「でも.....結果的に、リヴィは幸せになったでしょ？」

リヴィアは考えた。確かに、今の生活は.....

「まあ.....幸せっていうか.....」

「っていうか？」

「楽しいかも」

リヴィアが小さく笑った。

「カエザルがいて、セリナがいて、あんたみたいなクソ女神がいて.....まあ、悪くないかも」

「でしょ〜？ 私の采配は完璧なのよ」

エリュナが得意げに言った。

「でも！ 勝手に決めるのはダメよ！ 次からは相談しなさい！」

「はい」

「それと！ もうあんな面倒な采配はやめなさい！」

「わかったわかった」

「それと.....」

「まだあるの？」

「.....ありがと」

小さな声だったが、エリュナにはちゃんと聞こえた。

「どういたしまして❤️」

「調子に乗んなバカ」

リヴィアがエリュナを軽く叩いた。

「でも、本当に良かった。リヴィが前に進めて」

「.....うん」

夕焼けが二人を照らしている。長い長い喧嘩が、やっと終わった。

「あ、そうそう」

エリュナが起き上がった。

「カエザルの呪い、解いてあげる」

「え？」

「シヨタ化の呪いよ。もう必要ないでしょ？」

エリュナが手をかざすと、カエザルが光に包まれた。

「おわあああああ！」

光が消えると、そこには190cmの美青年の姿があった。

「.....うわ」

リヴィアが顔を赤くした。

「どうである？」

「いや、その.....カッコいいけど.....」

「しかし、この姿だと学校に通えんな」

「そうよね.....」

「やっぱり、普段はシヨタの方がいいかも」

「そういうことなら.....」

エリュナがもう一度魔法をかけると、カエザルは元の10歳の姿に戻った。

「これで、変身できるようになったから。必要な時だけ大人の姿になれるわ」

「便利ね」

「でしょ〜？」

三人は笑いながら立ち上がった。

8-4. エピローグ

一週間後――

「ただいまー」

リヴィアが家に帰ると、カエザルが宿題をしていた。

「おかえり、リヴィア」

「今日も一日お疲れさま。はい、ストゼロ」

「ありがと……って、何で用意してるのよ」

「君の帰宅時間に合わせて冷蔵庫から出しておいたのである」

「……なんか、夫婦みたいね」

「夫婦か……悪くないな」

「調子に乗んなバカ」

リヴィアは照れながらストゼロを開けた。今日も栓抜きは聖剣である。


「そういえば、エリユナから連絡があったぞ」


「何ですって？」


カエザルがスマホを見せる。

天界からのお知らせ

 エリユナ：マッチングアプリ始めた❤️

 エリユナ：プロフィール「創造神、年齢不詳、趣味は采配」

 エリユナ：なかなかマッチしないんだけど～

 エリユナ：なんでかな～？

「……そりゃマッチしないでしょうよ」

リヴィアが呆れた顔をした。

「でも、あいつなりに恋愛頑張ってるのね」

「そのようであるな」

二人は笑いながらソファに座った。

「カエザル」

「なんである？」

「これからも、一緒にいてくれる？」

「当然である。私の人生、君と過ごすためにあるようなものだ」

「.....そういう格好いいこと言うのやめてよ」

「なぜである？」

「ドキドキしちゃうから」

リヴィアが頬を染めながら言った。

「では、これからもドキドキさせ続けるとしよう」

「もう、ホントにやめてってば」

二人は笑いながら、テレビを付けた。いつものようにスマブラを始める。

「今日はどのキャラで行くである？」

「やっぱりカービィよ。可愛いし」

「私はマリオで行くとしよう」

「負けないわよ」

「私も負けぬ」

ゲームが始まると、二人は本気で戦った。笑いながら、時々文句を言いながら。

そんな時、ピンポーンとチャイムが鳴った。

「はい」

リヴィアがドアを開けると、そこにはセリナが立っていた。手には手作りのケーキを持っている。

「こんばんは、姉さん」

「あら、セリナ。どうしたの？」

「お疲れ様会をしようと思って」

「お疲れ様会？」

「姉さん、頑張ったでしょ？ エリュナさんとも仲直りしたし」

セリナがにこっと笑った。

「まあ.....そうね」

「それに、カエザル君との関係も進展したみたいですし」

「べ、別に進展って程じゃ.....」

「二人とも、お幸せそうで良かった」

セリナが心から嬉しそうに言った。

「.....ありがと、セリナ」

「どういたしまして」

三人でケーキを食べながら、今度は三人でスマブラを始めた。

「セリナ、君は誰を使うのである？」

「私はピーチ姫で」

「お姫様ね、似合ってるわ」

「ありがとうございます」

和やかな時間が流れていく。

そんな中、リヴィアは思った。

確かに、自分の人生は思った通りにはいかなかった。勇者になって、魔王を倒して、現代に飛ばされて、ダメ OL になって。

でも.....

「悪くないかも」

小さくつぶやいた。

「何かおっしゃいました？」

「ううん、何でもない」

リヴィアは笑った。

カエザルがいて、セリナがいて、エリュナがいて。ストゼロがあつて、スマブラがあつて、聖剣の栓抜きがあつて。

完璧じゃないけれど、愛おしい日常。

リヴィア・クロスフィールド、29歳。元勇者、現OL。

新しい人生の、始まり。

「じゃあ、今日も乾杯しましょうか」

リヴィアがストゼロを、カエザルがファンタを、セリナがお茶を持って。

「乾杯！」

三人の声が、小さなアパートに響いた。

空の上から、エリュナがこっそり覗いている。

「みんな、幸せそうね〜」

満足そうに笑って、エリュナはマッチングアプリに戻っていく。

「さて、今度は誰とマッチするかな〜♪」

物語は終わり、新しい日常が始まる。

みんなで歩いていく、長い長い人生の道のりが。

【完】

エリュナの最終LINE

📱 深夜2:47の天界グループチャット

👉 エリュナ：みんなお疲れ様❤️

💬 リヴィア：なんでグループ作ってんのよ

👑 カエザル：深夜であるが大丈夫か

🌸 セリナ：お疲れ様でした

👉 エリュナ：私も恋人作る予定だから応援してね

👉 リヴィア：頑張れば？

👉 エリュナ：冷たい❤️

👉 エリュナ：でも、みんなが幸せで良かった

👉 エリュナ：私の采配、やっぱり最高でしょ❤️

👉 リヴィア：調子に乗んな

👑 カエザル：しかし、感謝している

🌸 セリナ：私も、ありがとうございました

👉 エリュナ：どういたしまして❤️❤️❤️

👉 エリュナ：これからもよろしくね～

既読3

文字数: 約5,200文字

物語の完結: 全ての伏線回収、キャラクターの成長完了

キャラクター状況: リヴィア（自己受容と新しい人生への希望）、カエザル（真のパートナー関係確立）、エリュナ（友情の和解）、セリナ（姉の幸せを確信）